

現場の諸状況と切り結ぶ教養科目「キリスト教学」の多角的・横断的展開

背景・目的

当事者の生の声を聞きながら、性的多様性の認識、障害者の社会参加、カルト対策などの諸課題を共有する思考を養い、教養科目「キリスト教学」の展開を試みる。

実施内容

【車椅子から見た共生社会】朝起きて夜寝るまで人の手を借りないと生きて行けない車椅子生活から人の心遣いが見える。有田憲一郎氏（太白区ありのまま舎）は、顎が硬直し、はっきりとした言葉を発することができない。しかし、学生たちは聞き取りにくい有田氏の話に緊張して聞き取ろうとする。自分の生き立ち、受けてきた差別、インド・バン格拉デシュ旅行、現在取り組んでいる活動などについて語った有田氏は、「生きる」ために「信頼」が不可欠であることを強調する。「信頼ゲーム」を行った。10人グループの中で一人が真ん中に立つ。その人は目をつぶって他の人に体を預ける。「怖い！」という声が学生たちの中から上がる。順番に一人ひとり体験してもらう。有田氏にとって、人に体を預けるのは毎日の営みである。ひとりの人間の存在のために周囲の人たちの膨大なエネルギーが注がれている。他者との具体的な出会いを通して、学生たちは、他者を理解し支えることが、障害者と健常者が共に生きる社会への第一歩となることを体験学習できた。

【カムアウトした同性愛者の訴え】性的少数者は、芸能界では可視的存在にされることもある。しかし、それは、異性愛者側に立つメディアが視聴率アップを狙った仕掛けであり、同性愛者の当事者たち側の苦悩は深い。ゲイの半数ははじめられた体験があり、65%は自殺を考えたことがある。自殺未遂は15%、うつ病になるゲイ

は、十代で50.7%、20代で47.6%である。しかし、苦悩と社会的・経済的抑圧は、男性の同性愛者よりも女性の同性愛者の方が大きい。結婚のプレッシャーも強く、社会的に表に出にくい。こういうところにも男女差別がいびつな形で見られる。同性愛者たちは、カムアウトしなければ「異性愛者」とみられ、カムアウトすれば「同性愛者」＝性的異常者と見られてしまう。このダブルバインドゆえに同性愛者は疎外感を味わう。あらゆる方面で異なるものを排除する力学が働く人間社会を変えていくには、異質の価値の共生を認識する教育が求められる。

【カルト脱会者の証言】カルト団体に関わり、自らの青春を奪われながらも、そこから必死に脱出し、失われた人生の貴重な時間を質的に取り戻す働きに関わる脱会者2名（A子、B子）の証言は、周囲の支えなしに人は生きていけないことの証でもある。A子は、多感な高校時代に強烈な終末論を説く団体に心惹かれていった。それが自分の人生の全てだと自らに言い聞かせ、物事の説明の根拠をすべて団体の教義に求め、答えが与えられていると確信し続けた。途中で、その思いが続かなくなり、苦しみの果に脱会するに至った。一方、B子は、街頭アンケートを通してカルト団体に加入し、それまでの華やかな学生生活を離れて過酷な布教活動に身を投じた。見ず知らずの男性を結婚相手としてあてがわれ、子供を出産した。長期にわたる外国暮らしの中で、ドメスティックバイオレンスを体験し、離婚を決意、帰国後に親権も獲得した。現在は、弁護士を目指している。学生たちに優しく語りかける両者の凄まじい証言は、学生たちに、傷ついた自分の人生を肯定する勇気を持つことの大切さを実感させた。